

結 婚 二 年 目

松 島 武 治

この夜は残業があつて、ぼくは九時過ぎに家に帰った。会社から家までバイクで五分くらいだが、冬のことですっかり冷え切つて家に着く。玄関の戸を開けてまず氣にとめるのは、今年から夜間の短大へ通っているS子(ぼくの奥さん)の靴があるかどうかである。S子が帰っていればストーブがつけてあり、暖かい部屋で着替えができるのだ。

S子は先に帰っていた。バイクの音を聞いたのだろう。玄関横の部屋の戸を開けて迎えに出てきた。

「お帰りなさい。ごめんなさい」

見ると、畳に頭をすりつけている。これまでもそういう仕草であやまられたことがあり、それもみんな大したことでなかったのであまり氣にはならなかった。彼女一流の愛嬌なのだ。

「ただいま帰りました。何だい？」

「あのね、お父さんが部屋が寒い寒いっていうので、裏の障子戸を買ったの」

「ふーん」

「それがね、二枚で一万六千円するの。今月もお金ないわ」

「なんで急に無理して買ったの？」

「だって・・・お父さんが戸を替えなきゃ体がもたんからって・・・」

「ばか、だからってすぐ新品にしたのか？　もう入ってるのか？」

「ううん、まだ。明日寸法とりに来るって。お金も入ったあとでいいって」

「だったら、ことわっちまえ！」

「だって、お父さんが・・・」

ぼくは構わずに部屋に上がる。S子のやり方は見えすいていた。腹が立つてきた。

ぼくの父は今年八十三才になるが、年のわりにはまだ元気な方だ。今までに妻を三人替えている。最初は病死し、二人目は事実上の離婚（終戦後、疎開先から父だけ勝手に名古屋へ出てそれっきりになった）、三人目はぼくの母で内縁のままやはり病死した。子供は七人いるが、一番下のぼく以外はみな県外で手紙一本の付き合いもない。七十四才の時心臓発作で倒れてからはずっとぼくが面倒を見ている。若い時からオートバイや自動車に熱中し、その事だけに情熱を傾け、家族や財産などには目を向けなかった。

S子はそういう父に批判的だった。親というものは子供のためには自分を顧みないもので、自分勝手な生き方をしてあとは子供に面倒を見させるなどというのは親として失格だという。彼女の父はいわゆる戦中派で、戦後の混乱期を家庭を中心に家長らしく生きてきた人であり、そういう親に育てられたこともあるのだろう。また都会の真ん中に住みながら、今までガスも水洗トイレもなかったぼくの家の状態や、脱腸のまま二十才まで放っておかれたというぼくの成長過程を聞いているせいでもあるらしい。

ぼく自身、死んだ母には母らしい感情を今でも持っているが、父には父らしくされた覚えがあまりなかった。しかし一人の人間として父を見た場合、金や地位にこだわらず自分の仕事に一生を費やした父の人生はある意味でぼくの尊敬に値していた。もし父が社会的に成功していればS子や他の回りの

人の父に対する批難^{ママ}も違っていただろう。そう思うとぼくはそうした批難を素直に自分のものにする事ができないのだ。

「父さんがそんな無茶を言うはずがない。お前は どうしていつもオヤジの言うことを悪くとるんだ？」

「でもそう言ったのよ、お父さんは」

「言ったにしろ、すぐやれなんて言うはずがない」

「じゃ、あなたからそう言つてよ、私からは言えないわ」

S子は少し開き直った。

ぼくは着替えを済ませると、父の部屋へ行つた。

「ただいま、お父さん」

「あ、お帰り。ごくろうさん、遅かつたな」

父はいつものようにたたんだ布団にもたれ、電気毛布にくるまつたままコクンと頭をたれた。

「うん、年末で忙しいもんでね。・・・この障子はもう寿命だね。寒いだろう？」

「ああ、寒いな。スキ間だらけだし、紙をはつても猫がすぐ破るのでどうもならん」

そういつて腹の上にうずくまつている飼猫の頭をポンとたたいた。

「今替えてもいいけど一万六千円もするらしいんだ。金の余裕がないもんでさ。近いうちに入れ替えるから待つておくれよ」

「ああ、けつこう。こうやつてストーブと電気の毛布があればどうつてこない」

「建具も高くなつたね」

「そうだろう。無理せんでもいい。やつていけんことはないから」

それだけのやりとりをして、ぼくは自分たちの部屋に戻つた。

「さ、明日ことわっておけ。寸法とりに来る前に電話すればいい。やつぱり無理はいつてないじゃないか」

S子は、不満そうな顔つきでむつつりしていた。

「・・・お父さんがあたしたちがお金で四苦八苦しているのも知らないであんまり勝手なことというもんだから」

「それみる。腹いせでやってるんじゃないか。大体おれに相談もなしに注文するのがおかしいんだ」

「あなたに相談してたら何もできないわ。ガスだって水道だってみんなあたしが引いたのよ！」

「そんなことを言ってるんじゃない！二年もなるのにいい加減オヤジの言うことを理解できるようにならんのか!？」

「・・・わかりました。すみませんでした」

S子はまた開き直った。くやし涙で目がうるんでいた。

ぼくはカッとなった。

「そんなにオヤジがいやならもう出ていけ！」

S子は顔を上げてぼくをにらんだ。

「あなたこそなぜすぐそう極端になるの？それこそそんな問題じゃないでしょ」

「問題もくそもない。オヤジは俺の一部だ。それがいやならいかたがない」

「あたしにはもう行く所なんかないわ。出ていくのならあなたが出ていけばいいのよ。お父さんも連れて行つてちょうだいね」

「うるさい!!」

ぼくはすっかり頭にきてしまった。いつものようにそう怒鳴ると、あとはふてくされて何もいわなくなった。

そうすると、S子は急に態度を変える。けんかの時、先におりるのはいつもS子だった。ぼくはそれを知っているから容易には折れない。安心していつまでも怒っている。

「ほんとにごめんなさい。あたしが悪かったわ。あ、何か食べたいものない？ ラーメン作ろうか？」

S子はぼくの機嫌をとろうとする。自分の不満をどこかへしまい込んでニコニコ顔で世話をやこうとする。

ぼくは勝手に風呂へ行くことにした。するとS子も行くと言い出して用意をする。

「もう怒らないで、ね？ いつしよに行きましょう」

それを無視し、ぼくは自転車を出して走り出す。S子は小走りに追ってきた。その足音が気になったが、間隔が離れば走るのをやめるだろうと思いい、思い切りペダルを回す。一度も振り返らない。

S子がぼくに合わせて風呂を出るかも知れないので、時間を見はからいながら体を洗った。帰ったら少し金を持って近くへ久しぶりに飲みに行こうなどと考えていた。

風呂を出て自転車置場へ行くと、意外にもS子が待っていた。自転車置場の片隅にうずくまったまま、うるんだ目でぼくの顔を見つめていた。

「何だ……。ずっと待っていたのか？」

「ん」

ぼくはいくらか感動していた。他に言うこともなく、思わず笑ってしまった。S子は安心したように立ち上がり、子供が泣くような声を立ててぼくの腕にしがみついてきた。無論、ぼくの機嫌はすっかり直っていた。

「まだ風呂に入っていないんだろ？ 入ってこいよ。あとで迎えに来てやるから」

「いいの。今日は帰る」

「ばかだなあ。寒かっただろう」

ぼくは自分のしていたマフラーを貸してやった。S子は風呂の用具をぼくに持たせ、マフラーを首にグルグル巻きつけた。

しばらくは話すこともなく歩いた。ぼくはS子の無邪気さやあどけなさを考えていたのだが、ふと、結局はS子の手玉に取られてしまったのではないかという気がして思わず苦笑した。

「どうしたの？」

「いや、何でもないよ」

ぼくは空を見上げて、オリオン座を見つけ、ボンヤリと見えるその大星雲をS子に示した。S子は何度説明されてもその居所がわからないらしかつた。

結婚二年目、ある日の二人であつた。